

ポール・L・フアリス編

『市場構造研究』

——農業経済学における理論と実際——

Paul L. Farris ed., *Market Structure Research
Theory and Practice in Agricultural Economics*, Iowa State University Press, Ames,
Iowa, 1964, pp. vi+177.

高橋 伊 一郎

I

市場構造研究は、元来一九三〇年代におけるE・H・チェンバレンの独占的競争理論ないしはジョン・ロビンソンの不完全競争理論から発達したものである。その後ウィリアム・フェルナーその他の研究成果をふまえて、J・S・ペインによって体系化され、一般経済学の分野で「市場構造」研究として通用するようになった。かれの『産業組織』が刊行されたのは一九五九年のことである。

農産物マーケティングの研究分野でも、たんに個々の企業の立場からの分析に終らないで、マーケティング全体を分析する

気運が生じ、市場構造分析の手法が取り入れられるようになった。

そこで、一九五九年に中央北部地域第二〇委員会 (a North Central Regional Committee, NCR—20) (マーケティング経済学) が設けられ、その分科会は「農業経済学における市場構造研究にかんする報告」をとりまとめて、『ジャーナル・オブ・フアーム・エコノミクス』誌(一九六一年八月号)に発表した。⁽¹⁾ 市場構造研究の本質と構成をしめし、重要文献の目録を付している。手頃な入門文献といえよう。

第二〇委員会のこの分野における活動はそれに止じまらない。その後援で市場構造研究作業部会 (a Market Structure Research Workshop) が、一九六二年六月にバーデュー大学で開催された。そのねらいは市場構造の現代的概念の構成と、その概念を研究に適用する上で有効な方法を探究することにあつた (iii頁)。

本書はその作業部会の産物で、そこでの提出論文、討論および作業班別報告をおさめたもので、その内容はつぎのごとくである。

Part I Framework

Research on the Structure of Agricultural Markets

.....R. G. Bressler, Jr.

Part II Impact on Market Structures, Firm Organization

and Industry Efficiency

2. Considerations of Internal Firm Organization and Behavior Factors and Their Relation to Research on Market Structures.....R. L. Kohls
3. Capital, Finance and Market Structure
——Two ApproachesAllen B. Paul
4. Labor Organizations and Their Relation to Market Structure and Industry Efficiency
.....Daniel C. Williams

Part III Operational Criteria

5. Operational Criteria for Public Programs Affecting Firm Entry and ExitRobert L. Clodius
- Discussion : Random Comments on Entry and Public Policy.....Harrison F. Houghton
- Discussion : Operational Criteria for Public Programs Affecting Firm Entry and Exit
.....Willard F. Williams
6. Operational Criteria for Evaluating Market PerformanceStephen H. Sosnick
- Discussion : Operational Criteria for Evaluation of Market Performance.....Stanley K. Seaver
- Discussion : Operational Criteria for Evaluating

Market PerformanceWillard F. Mueller

Part IV Workshop Conclusions

7. Report of Workgroup 1 : Relation Between Managerial Goals and Values and Market Behavior and StructureVernon Sorenson
8. Report of Workgroup 2 : Analytic and Quantitative Techniques and Data Needs for Measurement in Market Structure Research
.....G. G. Judge and George Brinegar
9. Report of Workgroup 3a : Operational Criteria for Evaluating Market Performance of Firms and Industries in Food Marketing and Processing
.....Paul E. Nelson, Jr.
10. Report of Workgroup 3b : Criteria for Evaluating Performance Norms of Firms and Industries
.....Harold Breininger
11. Report of Workgroup 4 : Impact of Factors External to the Market on the Organization and Behavior of FirmsPaul L. Farris
12. Summary Remarks
.....Winn F. Finner and R. G. Bressler, Jr.

Part V Summary

註(一) Robert L. Clodius and Willard F. Mueller, "Market Structure Analysis as an Orientation for Research in Agricultural Economics," *Journal of Farm Economics*, Vol. 43, No. 3, August 1961.

II

R・G・プレスラー・Jrの第一論文によると、一九六一年のアメリカ合衆国の農産物マーケティング経済関係の研究のうち、約三分の一が市場構造研究の分野に入る。しかしその盛況は、この分野の研究がすぐれた成果をおさめていることをいみずるものでない。むしろ現状は逆であって、一、二の例外はあるとしても一般に記述段階(資料の収集と分類)を脱していない。そこでかれは市場構造研究を方法的に反省し、もっと強力におし進めるか、ないしは逆に大幅に縮小すべきかを検討する時期にあるとしている。本作業部会の共通の問題意識はここにあるとみられる。

市場構造研究の行詰りを打開する方向として、大きくわけて二つの態度が参加者にみられた。その一つは、市場構造研究をいっそう理論的に深化させる態度である。この点の心構えについてはウィラード・F・ウィリアムスの討論論文に、もっとも明瞭にしめされている。この方向をたどるものとして、市場構

造研究を構成する構造(structure)、行動(conduct)および成果(performance)の三つの概念とその相互の関係をもっと精密に体系化する努力が必要とされ、その発展として動態化への指向もみられる。第二部にはこのような論文が収録されている。第二の方向は、市場構造研究の理論体系の深化への努力よりも、むしろオペレーショナルな実践的処理方式を探ることである。第三部には、その方向の論文が収録されている。作業班の結論報告(とくに第二、第三a、第三b作業班)およびプレスラーの総括所見からすると、この方向が多数派のようである。

III

一般的には、ある産業における市場成果(たとえば価格、生産および技術進歩のきまり方やあり方)は、特定の市場構造のもとで企業がおこなう主体的な市場行動の結果としてきまるとされている。そして市場構造の変数としては、ふつう販売者と購買者の集中度、製品差別の程度および市場参入条件が考慮されている。それに応じて企業の市場行動としては、価格設定、製品化と販売促進、および他企業の競争排除などについての企業政策が問題とされる。

これら三つの概念の相互間の関係について単純かつ強力な疑問は、同じ市場構造のもとでも同じ市場行動がとられるとはか

注(一) Robert L. Clodius and Willard F. Mueller, op. cit.

ぎらないし、また市場成果も同じでないのは何故かということである。そこで R・L・コールズは、第二論文で企業の市場行動のタイプのちがいを、企業の内部組織にかかわらせて説いているし、第一作業班の結論報告(第七論文、バーノン・ソレンソン執筆)では管理活動にかかわらせて説明しようとしている。

第一作業班の結論報告では、企業行動の変数を結果(outcomes)・行動変数(behavioral variables)および内部条件と外部条件(internal and external conditions)とに分ける。コールズのいう企業の内部組織とは、ここでの内部条件に相当する。そしてこの結論報告では、企業の行動変数と結果は、その企業の内部条件と外部条件とによって影響をうけるとしている。ここでいう外部条件は、技術、政策、文化、経済環境などきわめて広い範囲にわたる。それは正に第四作業班の結論報告(第一論文、ポール・L・ファリス執筆)のいう市場外要因にあたる。

このように市場成果の決定要因を内包的にも外延的にも拡大して考察することは、けっして非難さるべきことでない。しかしその拡大の仕方が無原則であってはならない。せっかく市場構造論にまで整理し結晶させた従来の成果を前進的にふまえた上での体系的な拡大が計られねばならない。この点で疑問が残されている。

四

アレン・B・ボールの第三論文は、ペインに代表される市場構造研究の静態論的制約について批判している。つまりペインの分析は新古典派の流れをくみ、その制約をうけついでいる。⁽¹⁾市場組織(Market Organization)の不变を前提とし、主として問題を均衡条件からの乖離に限定している、とする(四〇—四一頁)。

ボールのいうが、ごく当たりとしても、問題はその理論の動態化をどのように立ち立てるかにあろう。この点についてポールはつぎのようにいう。市場組織の変化は、社会的分業の進行、新技術の導入および規模の経済に基づく、とする。ではこれらのいわゆる外的条件を、いかに構造分析にむすびつけるか。そこにかれの特長がある。つまりそれらの外的条件の変化は資本および金融にかかわるものであるとして、K・E・ボールドインの所説に示唆をえて貸借対照表アプローチ(the balance sheet approach)を説く(二八—二九頁)。

貸借対照表は資産、負債および純資本からなるが、企業内財産の所有権の仕組みを表示している。それらの仕組みは、その時の経済の不確実性を反映して変り、その変化は生産組織の変

化をもたらず。旧来の市場構造研究のほとんどは生産物市場を対象としていたが、ポールは資本市場に着目し、そこに動態化の足がかりをおいた。

第一作業班の結論報告では、動態化に関連させて管理(management)機能に着目している。すなわち経済変化に対する知識と予見は不完全なため管理機能が重要となる、というのである(一四〇頁)。先のポールの論に関連づけていえば、経済変化に対応させて資産構成をいかに変えるかという点で管理機能が働くことになろう。ただし第一作業班の報告は、ポールのいうように生産物市場に限定されているのであるが。

注(一) 市場組織は市場構造、市場行動および市場成果の三つの側面のすべてを包含する一般的概念である(一頁)。

五

市場構造研究のオペレーショナルな実践的な構成は、どのように進められたか。第二作業班の結論報告(第八論文、G・G・ジャッジ執筆)は、一般的な手順について簡明な紹介を試みている。

それによると、ここでは市場成果の改善が関心の的であるが、そのために市場構造の諸属性との間の機能的関係を追求する方法をとらない。なぜかといえば、市場構造と市場成果とはお互

に因果関係にあり、また構造上の知識から市場成果についてできる推論は、きわめて一般的なものでしかないからである。

そこで第二作業班がとるオペレーショナルな方法はつぎのとくである。(a)問題の所在を探り、(b)その産業の市場成果について理想的なあり方と現実の姿との間の喰違いを明らかにし、(c)その喰違いを埋めるための諸施策を提案する。そして、(a)の方法としては大まかなテストないしは一般的指標をつかう。(b)のためには、理想的なあり方を探る方法として競争的効率モデル(the competitive efficiency model)を利用する。(c)では、構造的属性の時間的変化の態様についてはマルコフ連鎖分析(Markov chain analyses)、産業間の連関のあり方についてはレオンチェフ投入—産出法(the Leontief input-output technique)が用いられる。

R・G・プレスラー・Jrの総括所感からすると、この第二作業班の結論報告における方法は多数派を占めているとみられる。ただそこでは市場成果を一括したままでオペレーショナルな分析手順を考察しているのに対して、ステフェン・H・ソスニツク、第三a作業班および第三b作業班の諸報告(第六論文、第九論文および第一〇論文)は、市場成果を二ないし二三の諸側面に整理して、それぞれの評価基準を考察している。しかし分類整理の基準には、必ずしもお互に調和しているとはいえ

ない効率と厚生との二つが利用され、したがって整理された成果の諸側面も相互間に統一を欠く面もある。現段階の分析手法における未熟さによるものか、不完全競争下の現実そのものの矛盾の反映であるのか。

以上のように、市場構造研究は理論的深化とオペレーションな処理という二つの方向をたどろうとしている。現在のところでは、その二方向は背反しあっているものごとくである。その両者を統一した方式がどのようにして生まれるかが、市場構造研究の基本的な課題であらう。